

ダニエル書 第六十一号

預言のタペストリーを解き明かす：ダニエル書の幻、契約、そして終末時代の封印の時を理解する

Jeff Pippenger

2024-01-25

ガブリエルは、第八章で示された二つの幻に関する知恵と悟りを与えるため、第九章でダニエルのもとに来た。

そして彼は私に悟らせ、私に語って言った。「ダニエルよ、私は今、あなたに知恵と悟りを与えるために来た。あなたが祈り求め始めたときに命令が出され、私はそれを知らせに来た。あなたは大いに愛されているからだ。ゆえに、この事を理解し、この幻を思い巡らせよ。」ダニエル書 9:22、23

ダニエルが必要としていた「理解」を得るために、ガブリエルは彼に「事柄」と「幻」の双方を理解するよう告げた。「事柄」とは、聖所と軍勢が踏みにじられることの幻であり、「幻」とは、1844年10月22日の出現の幻であった。ホワイト夫人もまた、ダニエルが七十年の捕囚と二千三百年の関係を理解しようとしていたと私たちに知らせる際に、これら二つの幻を強調している。七十年はガブリエルが「事柄」と特定したものであり、「幻」は二千三百年であった。ガブリエルが二千三百年の解釈を与えるとき、ダニエルは終わりの日の「賢い者」を代表している。「賢い者」はガブリエルの解釈において「事柄」と「幻」の双方を悟るが、悪しき者は悟らない。ミラー派は「事柄」と「幻」を理解していたが、限定的なものにすぎなかった。

四百九十年の猶予期間とは、レビ記二十五章と二十六章に示されている「七たび」の契約に対する四百九十年に及ぶ反逆に基づく期間であった。七十年の捕囚は、その地が安息を享受することを許されなかったすべての年の合計であった。

キリストが多くの人々と契約を確認したあの一週間は、千二百六十日ずつの二つの期間によって表される、彼の契約をめぐる争いの例証であった。その預言的な一週間は、神の印を象徴する十字架によって二分された。

「神の民の額に押される、生ける神の印とは何でしょうか。これは天使には読み取れるが、人間の目には読み取れない印です。というのも、滅びの天使はこの贖いの印を見なければならぬからです。悟りある心は、主に養子として迎えられた息子たちと娘たちのうちに、カルバリーの十字架のしるしを見てきました。神の律法を犯した罪は取り除かれています。彼らは婚礼の礼服をまとい、神のすべての戒めに従順で忠実です。」『Manuscript Releases』第21巻、52。

その一週は、538年の「日曜令」（獣の刻印）を境に二つに分けられた、各々千二百六十年に及ぶ二つの時代を象徴していた。その期間には、まず異教が、ついで教皇制が、聖所と軍勢を踏みにじた。千二百六十日のあいだ、キリストはご自身の証しをなさり、さらにもう千二百六十日のあいだ、キリストは弟子たちを通して同じ証しをなさった。千二百六十年のあいだ、サタンは異教を通して自らの証しをなしたのち、さらにもう千二百六

十年のあいだ、サタンは教皇制を通して自らの証しをなした。

古代イスラエルの不従順によって神の「争い」となった契約は、土地を休ませることと、四十九年ごとに祝われるヨベルの年を定めた、レビ記25章の契約であった。

主はシナイ山でモーセに語って言われた、「イスラエルの子らに語って言いなさい。『わたしがあなたがたに与える土地に入るとき、その土地は主のために安息を守らなければならない。六年の間、あなたがたは自分たちの畑に種をまき、六年の間、自分たちのぶどう畑を剪定し、その産物を集めなければならない。しかし第七の年は土地にとっての安息、主のための安息である。あなたがたは畑に種をまいてはならず、ぶどう畑を剪定してはならない。刈り入れの後に自ずと生え出たものを刈り取ってはならず、手入れしていないぶどうの木やぶどうを集めてもならない。これは土地にとっての安息の年だからである。土地の安息の間に生じるものは、あなたがたの食物となる。あなたがた自身のために、あなたがたの男奴隷、女奴隷、雇い人、あなたがたと共に滞在している寄留者のために、またあなたがたの家畜や、あなたがたの地にいる野の獣のためにも、その実りはすべて食物となる。あなたは自分のために安息の年を七回、すなわち七年を七度数えなければならない。こうして七回の安息の年の期間は四十九年となる。その後、第七の月の十日に、贖いの日に、あなたがたはヨベルの角笛を鳴り響かせ、あなたがたの全土に角笛の音をとどろかせなければならない。あなたがたは第五十年を聖別し、その地のすべての住民に向かって全土に自由を布告しなければならない。それはあなたがたにとってヨベルの年であり、各人は自分の所有地に帰り、各人は自分の家族のもとに帰らなければならない。その第五十年はあなたがたにとってヨベルである。あなたがたは種をまいてはならず、その年に自ずと生えたものを刈り取ってはならず、手入れしていないぶどうの木やぶどうを集めてもならない。これはヨベルであり、あなたがたにとって聖なるものであるからだ。あなたがたは畑で生じた産物を食べるであろう。このヨベルの年には、各人は自分の所有地に帰らなければならない。』」 レビ記 25:1-13.

二千三百年の預言の最初の期間は、キリストが契約を確認した一週や四百九十年の場合と同様に、レビ記二十五章と二十六章の「七たび」と直接関連している。

それゆえ、よく知り、悟りなさい。エルサレムを復興し建て直せとの命令が出てから、油注がれた君に至るまで、七週間と六十二週間がある。街路は再び整えられ、城壁もまた、困難な時にも築かれる。ダニエル書 9:2

紀元前457年から数えた六十九週はキリストの洗礼に至り、彼が契約を堅くしたその週の始まりとなり、その契約は神の「争い」の契約であった。だが、「七週と六十二週」という語句によって六十九週から切り離された「週の週」（四十九年）があった。紀元前457年から始まって四十九年が定められており、これはレビ記二十五章の契約とヨベルの祝祭を明確に指し示している。その四十九年は、ヨベルの周期の象徴であるだけでなく、七週の祭の四十九日に続く第五十日である五旬祭の象徴でもあった。

2300年の最初の49年、490年、そして契約が確認された1週は、いずれもレビ記26章で「七つの時」として表されている2520年と直接結びついている。2300年の預言のあらゆる要素は、1863年にアドベンティズムが棚上げして退けた「七つの時」と直接結びついている。「七つの時」はヨベルの契約の象徴であり、このため、1844年10月22日に2300年が終

わったとき、まさに同じ日に2520年も終わったことにも注目すべきである。というのも、モーセはレビ記25章にこう記しているからである：

あなたは自分のために七つの安息年を数えなければならない。すなわち七年を七度、その七つの安息年の期間はあなたにとって四十九年となる。そののち、第七の月の十日、すなわち贖罪の日に、ヨベルの角笛を鳴り響かせ、あなたがたの全地に角笛を吹き鳴らさなければならない。レビ記 25:8, 9.

二千三百年の中のあらゆる預言期間は、レビ記二十六章の「七つの時」と直接結びついており、両方の預言期間が終わったその日も含まれている。最初の四十九年は、神の民がバビロンから出てくるときに完成させられるエルサレムの再建と回復の働きを指し示していた。神殿は第三の勅令の前に完成したが、それと同様に、第三の天使が到来する前にミラー派の神殿も完成した。しかし紀元前457年以後も、「街路」はなお再び築かれる必要があり、「城壁」も「苦難の時にも」再建される必要があった。アルファでありオメガである方として、イエスはいつも物事の終わりをその始まりによって示される。そして1844年10月22日以後、ミラー派は「苦難の時にあって」、「街路」と「城壁」を完成させることになっていた。

ホワイト夫人は、エルサレムを取り巻く文字どおりの保護の城壁を、神の律法の象徴とみなしている。そして1844年10月22日の直後、忠実な者たちは天の聖所へと導かれ、神の律法（城壁）を認識した。安息日を含む神の律法を認識するために、ミラー派は古代イスラエルの契約へと立ち返るよう導かれた。文字どおりの「街路」の回復とは、ミラー派がエレミヤの「いにしへの道」に立ち帰ったときに霊的に成し遂げられた回復のことである。城壁と街路が据えられる時期にあるはずの「困難な時」の成就是1844年以後であり、まさにその時代に差し迫り、ほどなく始まった南北戦争が、その困難な時を表していた。

もし彼らが忠実であったなら、彼らは象徴的なヨベルの第五十年（奴隷が解放される年）に到達していただろう。それはまた、ペンテコステの第五十日（解放のメッセージが全世界に届けられる）にも表されていた。しかし1844年以降、大多数は安息日の光に反対し、1863年には、エリヤ（ウィリアム・ミラー）によって彼らに伝えられていたモーセのメッセージ（「七たび」）も拒絶した。言い換えれば、彼らは自分たちが修復してその上を歩むはずであった「街路」（いにしへの道）から背を向けたのである。

イエスは常に、初めによって終わりを示される。そして、終わりの日に十人の乙女のたとえが繰り返されるとき、エルサレムの回復の業が再び成し遂げられる。「街路と城壁」は「苦難の時」に建てられる。私たちは今や、その苦難の時に入りつつある。1844年10月22日は、間もなく施行される日曜法を予表している。ゆえに、黙示録十一章の「大地震の時」が到来するとき、「街路と城壁」は苦難の時に建てられる。私たちは今、その苦難の時を、イスラムの戦争の激化によって引き起こされる「諸国民の怒り」と特定する。

「苦難の時」に関して以前に書かれていたことを説明している際に、彼女は『Early Writings』という本に記録されている説明をした。

1. 33ページには次のように記されている。「私は、聖なる安息日が、神の真のイスラエルと不信者との間の隔ての壁であり、今後もそうであり続けるのを見た。また、安

息日こそが、神の愛する、待ち望む聖徒たちの心を一にする重大な課題であることを見た。私は、安息日を理解せず守っていない神の子どもたちがいるのを見た。彼らはそれに関する光を拒んではいない。そして、患難の時の始めに、私たちが出て行って安息日をいっそう十分に宣べ伝えたとき、私たちは聖霊に満たされた。」

この見解は1847年に与えられたもので、その当時、安息日を守っている再臨派の同胞はごくわずかであり、そのうちのさらに少数しか、その遵守が神の民と不信者との間に一線を画するのに十分な重要性をもつとは考えていなかった。今やその見解の成就が見え始めている。ここで言及されている「その艱難の時の始まり」は、災いが注がれ始める時を指すのではなく、キリストが聖所におられる間に、それらが注がれる直前の短い期間を指している。その時、救いの働きが終結に向かう一方で、地上には苦難が訪れ、諸国民は怒るが、第三天使の働きを妨げないように抑えられる。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが来て、第三天使の大いなる叫びに力を与え、七つの最後の災いが注がれる時期に立ち得るように聖徒たちを備えるであろう。『初期の著作』、85。

恩恵期間の終わりの直前に「短い期間」があり、そのとき「諸国民は怒るが、なお抑えられている」。同時に「後の雨」が到来する。「諸国民の怒り」は、黙示録11章で示されている象徴である。

諸国の民は怒り、あなたの御怒りが来ました。死者が裁かれる時が来て、あなたのしもべである預言者たちと聖徒たち、また小さな者から大きな者まで、あなたの御名を恐れる者たちに報いをお与えになり、地を滅ぼす者たちを滅ぼされる時が来しました。ヨハネの黙示録 11:18

シスター・ホワイトはこの節について解説している。

私は、諸国民の怒り、神の御怒り、そして死者を裁く時が、それぞれ別個のものであり、順を追って起こること、またミカエルはまだ立ち上がっておらず、いまだかつてなかったような艱難の時もまだ始まっていないことを見た。今、諸国民は怒りを募らせている。しかし、私たちの大祭司が聖所での働きを終えられるとき、彼は立ち上がり、復讐の衣をまとわれ、その後最後の七つの災いが注ぎ出される。

「私は、四人の天使がイエスの働きが聖所で終わるまで四つの風を押さえており、その後、最後の七つの災いが来るのを見た。」『初期の著作』 36。

「諸国民の怒りの激化」は恩恵期間が閉じる直前に起こる。というのも、その後「神の怒り」が続くからである。「神の怒り」は恩恵期間が閉じるときに起こり、「死者を裁く時」は千年期に行われる裁きを指し、1844年に始まった死者の裁きを指すものではない。

また私は、天から一人の天使が降りてくるのを見た。彼の手には底なしの淵の鍵と大きな鎖があった。彼は、竜、すなわちあの古い蛇である悪魔、サタンを捕らえ、千年の間彼を縛り、彼を底なしの淵に投げ込み、閉じ込め、その上に封印を施した。千年が満ちるまで、もはや諸国民を惑わすことのないためである。その後、しばらくの間、彼は解き放たれなければならない。また私は、いくつもの座を見た。そこに人々が座り、裁く権威が彼らに与えられた。また、イエスの証しと神の言葉のために首をはねられた人々の魂、そして獣もその像も拝さず、額にも手にもその刻印を受けなかつ

た者たちを見た。彼らは生き、キリストと共に千年の間、王として統治した。
ヨハネの黙示録 20:1-4.

聖徒たちに「与えられる」裁きは、彼らが千年王国の間に悪人に対して裁きを下すことを示しており、彼らが裁かれるということではない。

第一の復活と第二の復活のあいだの千年の期間に、悪しき者たちの裁きが行われる。使徒パウロは、この裁きが再臨の後に起こる出来事であることを示している。「主が来られるまでは、時が来る前に何事も裁いてはならない。主は暗やみの隠れた事柄をも明るみに出し、心のはかりごとを現わされる。」1 Corinthians 4:5. ダニエルは、いにしえの日の方が来られたときに「いと高き方の聖徒たちに裁き与えられた」と述べている。Daniel 7:22. この時、義人たちは神に対して王また祭司として治める。ヨハネは黙示録でこう言う。「私はいくつもの座を見た。そこに人々が座しており、彼らに裁く権威が与えられた。」「彼らは神とキリストの祭司となり、キリストと共に千年の間統べ治める。」 Revelation 20:4,

6. まさにこの時、パウロが予告したとおり、「聖徒たちが世を裁く」のである。1 Corinthians 6:2. 彼らはキリストと結ばれて悪しき者を裁き、その行いを律法の書である聖書と照らし合わせ、からだにあって行われたわざに従って一つひとつの事例を判定する。そのうえで、悪しき者がそのわざに応じて受けねばならない分が量り分けられ、それが彼らの名に対して死の書に記録される。

サタンもまた、悪しき天使たちも、キリストとその民によって裁かれる。パウロは言う。「私たちが天使たちを裁くことを、あなたがたは知らないのですか。」3節。さらにユダはこう述べている。「自分たちの最初の地位を守らず、自分の住まいを捨てた天使たちを、大いなる日の裁きのために、暗闇の下で永遠の鎖につないで留め置いておられる。」ユダ6節。

千年の終わりに第二の復活が起こる。そのとき、悪しき者たちは死者の中からよみがえらされ、「記されている裁き」の執行を受けるために神の御前に現れる。ゆえに、黙示を受けた者は、義人の復活を述べたのち、こう言っている。「そのほかの死者は、千年が終わるまで生き返らなかった。」黙示録20章5節。またイザヤは、悪しき者についてこう宣言している。「彼らは、囚人が穴に集められるように一緒に集められ、牢に閉じ込められ、多くの日ののちに罰せられる。」イザヤ書24章22節。大争闘、660、661。

したがって、「諸国民が怒ること」は、猶予期間が終わる前に世界に訪れる「苦難の時」を指しており、また「諸国民が怒る」とときには同時に「抑えられている」ということが明らかである。

「私は、諸国民の怒り、神の憤り、そして死者を裁く時が、それぞれ別個で明確に区別され、順を追って起こるのを見た。」『初期の著作』36。

「諸国民が怒る」時に、後の雨が降り始める。

その時、救いの働きが終わろうとしている間に、地上には患難が臨み、諸国民は怒るが、第三天使の働きを妨げないように抑えられる。その時、「後の雨」、すなわち主の御前からの潤いが下り、第三天使の大いなる叫びに力を与え、最後の七つの災いが

注ぎ出される時期に堅く立てるよう聖徒たちを備える。『初期の著作』85。

「諸国民が怒る」という時があるが、同時に彼らは「抑えられている」。まさにそのときにキリストは栄光の御国を打ち立てる。なぜなら、キリストは後の雨の時に御国を打ち立てるからである。

後の雨は清い者たちの上に降ろうとしている——そのときには皆、以前のようにそれを受けよう。

「四人の天使が手を放すと、キリストは御国を打ち立てられる。できる限りのことをしている者だけが後の雨を受ける。」スポールディングとマガン、3。

『初期の著作』の直前の二つの箇所は、諸国民が怒り、同時に「抑えられている」時に、四人の天使が四つの風を抑えていることを示している。したがって、諸国民が怒ることは「四つの風」として表されている。彼女はまた、四人の天使が怒れる諸国民を抑えているその時に、後の雨が到来することも記している。後の雨が到来するときに始まる期間、すなわち諸国が怒りながらも抑えられているその時期は、ミカエルが立ち上がり人類の恩恵期間が閉じるまで続く。その期間は救いの機会が閉じつつある時であり、ゆえに至聖所におけるキリストの最後の働きを表している。それは、彼が裁きの書から人々の罪、あるいは彼らの名のいずれかを消し去っておられる時期であるとされる。天使たちが四つの風を押さえているその期間は、十四万四千人が封印される時である。

第三の災いのイスラムは、「諸国民を怒らせる」力であり、第三の災いは2001年9月11日に到来したが、イスラムは直ちに「抑えられた」。「東風」はイスラムの象徴であり、イザヤは「東風」を、神が「とどめる（抑える）」「荒い風」として示している。イスラムの戦争は、産みの苦しみをする女として繰り返し描かれる。というのも、それは2001年9月11日、黙示録十八章の力ある御使いが降りたときに始まったエスカレートしていく戦争であり、そのことはニューヨーク市の大いなる建物が打ち倒されたことによって印づけられたからである。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ているのですか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされる時、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！そのとき、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主の一言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」Review and Herald、1906年7月5日。

1843年と1850年の図表では、イスラムは「軍馬」として表されている。第一と第二の災いにおけるイスラムが示されている黙示録9章では、イスラムの性質はイスラムの王の名によって明らかにされている。

そして、彼らの上には王がいて、それは底なしの淵の天使であり、その名はヘブライ語ではアバドン、ギリシャ語ではアポリオンである。黙示録 9:11

その聖句は第九章第十一節であり、旧約（ヘブライ語）で表されようと、新約（ギリシャ語）で表されようと、イスラム教の性質はアバドンまたはアポリオンであると預言的に示している。両方の名は「破壊と死」を意味する。

「天使たちは四つの風を押さえている。それは、枷を振り切って全地の面を駆けめぐろうとする怒れる馬として表され、その進むところには破壊と死がもたらされる。」
『原稿集』第20巻、217ページ。

四つの風は、聖書の預言における「怒れる馬」であり、いまにも解き放たれようとしている。「怒れる馬」の預言的特徴の一つは、抑えられてはいるが、なおも解き放たれようとし、全地に「破壊と死」をもたらそうとしていることである。

これらのテーマについては次回の記事で引き続き取り上げます。

ああ、神の民が、いまやほとんど偶像礼拝に陥っている幾千もの都市に迫る滅びを悟っていたなら！ しかし、真理を宣べ伝えるべき多くの者たちが、兄弟を告発し、断罪している。神の回心させる力が人の心に臨むとき、明確な変化が起こる。人々は、批判したり、壊そうとしたりする気持ちを持たなくなる。彼らは、光が世界に輝くのを妨げる立場には立たない。彼らの批判も、告発も、やむ。敵の勢力は戦いに向けて集結している。厳しい戦いが私たちの前に控えている。固く結束しなさい、兄弟姉妹たちよ、固く結束しなさい。キリストと一つに結ばれなさい。「『陰謀だ、と言ってはならない。…彼らの恐れるものを恐れるな、おののくな。万軍の主を聖とせよ。彼をあなたがたの恐れとし、あなたがたのおののきとせよ。彼は聖所となる。しかし、イスラエルの二つの家にはつまずきの石、つまずきの岩となり、エルサレムの住民には網となり、罟となる。彼らの多くはつまずき、倒れ、砕かれ、わなにかかり、捕らえられる。』」

世界は舞台である。その役者たち、すなわちその住人は、最後の大いなる劇で自らの役を演じる準備をしている。神は人々の視界から消えている。人類の大多数においては、利己的な目的を達成するために人々が結託する場合を除いて、何の一致もない。神は見えておられる。反逆する者たちに関する神の御旨は必ず成就する。神が混乱と無秩序の諸要素にしばしの間、支配を振るわせることをお許しになっているとしても、この世界は人間の手に渡されたのではない。地の底からの力が、劇の最後の大いなる場面を引き起こそうとして働いている。すなわち、サタンがキリストとして現れ、秘密結社で互いに結束している者たちのうちに、不義のあらゆる欺きとともに働くのである。結託への情熱に身を委ねている者たちは、敵の計画を実行している。原因には結果が伴う。

「不法はほとんど極みに達した。混乱が世界を満たし、間もなく大いなる恐怖が人類に臨もうとしている。終わりは非常に近い。真理を知る私たちは、間もなく世界に圧倒的な驚きとして突然押し寄せる事態に備えるべきである。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年9月10日。